この人物のオモテとウラ

2度の挫折を乗り越えた歌うお保マン

南部 直登 歌手

「歌う保険外交員」4月26日、朝のワイドショー「モーニングバード」（テレビ朝日）でMC羽鳥慎一がこう紹介したシンガー・ソングライター、南部直登（62）。映し出されたのはギター片手に代表曲「盛春歌」をライブで歌い、得意先を回って歌をサービスする姿だった。

生保は業界大手。外交員になったのは生活が苦しく、曲も売れない時期に、南部の歌を聴いた生保レディーから誘われたのがキッカケだ。「毎月1億円の契約を1年間継続すれば、翌月から100万円入る」と言われて右も左もわからない世界に飛び込んだ。これが大正解。2年目からトップセールスマンの仲間入りを果たすことになる。5万人の外交員の中で連続25年間、優秀な外交員として表彰され続け、今や生保業界の有名人。

「歌を歌っていたことがいい方向に回転してくれたんです。ステージを見てファンになってくれて契約してくれる。それが大きかった」（南部）

「モーニング――」に登場した得意先は「（会社に来て）即興で歌を作ってくれたり」とか、「保険抜きでフラッと来ていろんな話をして帰ったり」と、南部の〝営業〟について語っていた。

だが、テレビで取り上げられるまでは、シンガーとして2度挫折を味わった。生保業界に身を投じる前だ。

50年9月、福井市出身。高校時代に五木寛之著「青年は荒野をめざす」に感化され、ジャズギターに傾倒するようになり、卒業後はジャズマンの中川武・敦嗣の兄弟のもとで修業。76年に自身のバンドを結成する。デビュー曲は山口洋子・平尾昌晃のコンビによる「あなた横浜　わたしは神戸」。そこそこ話題になったものの、後が続かない。

バンドは解散。6年後に今度はジャズコーラスのグループを結成して曲も出したが、鳴かず飛ばず。そんな時に声を掛けてくれたのが恩人の生保レディーだ。それからは音楽という〝特技〟を生かして業界で一目置かれる存在になったが、胸にはくすぶり続ける夢があった。

「もう一度、音楽の道を」

救世主も現れた。テイチクエンタテインメントのトップだった飯田久彦氏との縁もあって、07年に再々デビューが実現した。曲は団塊世代に向けた応援歌「盛春歌」。力道山、長嶋茂雄、石原裕次郎といった大物が出てくる歌詞が話題になり、NHKの「歌謡コンサート」や「BS日本のうた」にも出演を果たした。

二足のワラジのキャリア30年

「モーニングバード」（4月26日）から

口コミでファンが増え、08年に故郷を歌った「九頭竜の流れ」は4万5000枚のセールスを記録。今年3月には間もなく定年を迎える父と息子・娘のことを歌った「親父のグチ日記」を日本コロムビアからリリースした。

「56歳で3度目のデビューができたのは〝しょぼくれて生きていたんじゃ尊敬もされない〟と思うことができたから。『モーニングバード』で還暦を過ぎたボクを〝ギターも人も古い方がいい。いい音が出るんです〟と言ってくれたのはうれしかった」（南部）

今も全国各地で年間150回以上もライブを行い、ラジオ日本のメーンパーソナリティーも担当している。さらに9時に出勤して、生命保険の営業も欠かさない。二足のワラジのキャリアは30年を迎えようとしている。